

Crown shapes of maxillary molars with delayed eruption

BATBAYAR Nomintsetseg

論文内容の要旨

第一大臼歯は、先天欠如が少なく、集団内では共通の形態を有している。しかし、1990年代以降、その萌出遅延や先天欠如について報告されている。この歯の咬合面形態が第一大臼歯と異なる場合、対咬関係を検討する必要がある。本研究の目的は、上顎第一大臼歯相当部に正常な第一大臼歯の萌出時期より標準偏差の2倍以上遅延して萌出した大臼歯の歯冠形態について、正常な時期に萌出した上顎第一・第二大臼歯と比較し、検討することである。

全身疾患、口腔顎顔面部の形態異常がなく、大臼歯以外の先天欠如歯を認めない女子で、上顎第一大臼歯相当部に遅延して萌出した4咬頭を有する左側大臼歯を被験歯とした。対照歯としては、女子で平均的な萌出時期に萌出した4咬頭を有する上顎左側第一および第二大臼歯とした。さらに、被験歯と対照歯ともに咬耗度が1以下であることとした。

資料を、12名（平均年齢 14.3 ± 2.5 歳）の被験歯と対照歯として第一大臼歯25歯（平均年齢 14.0 ± 2.3 歳）と第二大臼歯25歯（平均年齢 14.3 ± 2.7 歳）の口腔内模型とした。歯冠近遠心幅径、ならびに咬合面上に設定した指標点を用いた計測、さらに7指標点に関する判別分析を行い、以下の結果を得た。

1. 被験歯の歯冠近遠心幅径と設定した咬合面面積は、第一大臼歯と第二大臼歯の中間の大きさであった。
2. 判別率84%の判別関数が算出され、この関数によると被験歯は、第一大臼歯が5歯、第二大臼歯が7歯と判別された。
3. 被験歯の遠心舌側咬頭頂は、第一大臼歯と第二大臼歯の位置に二分していた。

以上のことから、上顎第一大臼歯相当部に遅延して萌出した大臼歯は、正常な時期に萌出した上顎第一大臼歯と第二大臼歯の中間の大きさであり、遠心舌側咬頭頂の位置から第一大臼歯あるいは第二大臼歯に近い歯に区分されることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、上顎第一大臼歯相当部に遅延して萌出した大臼歯の形態を正常に萌出した上顎第一および第二大臼歯と比較して調べた研究である。その結果、当該歯は判別分析により第一大臼歯あるいは第二大臼歯に近い歯に分類できることが示唆された。これらの知見は、歯学に寄与するところが多く、博士（歯学）の学位に値するものと審査する。

主査	影山 幾男
副査	宮川 行男
副査	岡田 康男